

節信。奥州へ旅行と聞いてゐるだが、いつの間に戻つて來られた。いやどうも眞黒な顔になられたな。いかに長い旅をしたと云つて、随分ひどく日に燻けたものだ。(能因の顔をみて噴飯す) これはどうも、は、は、は、

能因。そんなに黒くなりましたかな。(自分の顔を撫でる) これ、良因。貴様は上染だなどと無暗に煽てたが、ちつと色が濃過ぎたらしいぞ。

良因。ちつと染めあがりが悪うございましたかな。この頃は何分にも秋の日が強うございますから……。いえ、夏のうちは丁度好加減の黒さでございましたが、この半月ばかりで急に眞黒になりましたやうで……。

能因。では、もう少し洗ひ落すかな。いや、又あまり洗ひすぎて元の白地になつても困る。なかなか染加減がむづかしいな。(しきりに顔を撫でまはしてゐる)

節信。小野小町の草紙洗ひではあるまいし、洗へば白くなるの、黒くなるのと、それは一體どう云ふわけでごさるな。は、あ、さては貴公の顔の黒いのは何か墨でも塗つてゐられるのか。どうして、どうして、墨を塗つて濟むくらゐならば、三月も四月も獄門同様の苦しい思ひは致さぬのだが……この春から毎日毎日天日に照付けられて、面の皮はぴり／＼する。い

節信。や、並大抵の辛抱ではござらなかつた。

はてな。どうも貴公達の云ふことはよく判らぬ。どうで長い旅をすれば、自然に日にも燻けるものを、なにも好んで無理に黒くするにも及ぶまい。元來があまり白くもない顔を、又その上に黒くしてどうするのでござるな。

能因。それが其、どうも困つたな。もう斯うなつたら致方がない。實は其、旅といふのは……。あ、もし、もし……。 (云ふなと制する。)

能因。(かんがへる) いや、餘人でない節信殿だ。貴公に限つて、わたくしの秘密を打明けますれば、かならず御他言くださるな。よろしいか。承知いたしました。貴公とわしとの仲だ。八百萬の神々に誓つて、なにことも他言は致すまい。さあ、いかなる秘密も御遠慮なく……。 (膝をすゝめる。)

節信。これ良因。節信殿は格別、ほかの人に聞かれては大變だぞ。よく表に氣をつけろよ。

良因。はい、はい。(門をみる) 實を申せば、その奥州の旅といふのは嘘でござる。

能因。え、奥州へ旅立すると云つたのは嘘であつたか。なぜ又そんな嘘をついて……。 能因法師

能因。叱ッ、叱ッ。(良因に)これ、これ、表に誰もるないか。劍呑だぞ。

良因。大丈夫でございます。

節信。は、あ、判つた。さては貴公、義理の悪い借財でも出来たがために、遠い奥州へ旅行する

と詐つて、奥にかくれてゐたのだな。

能因。いや、いや、大晦日まではまだ間もあるのに、決してそんな卑怯なわけでは……。

節信。では……。(考へる)お、さうだ。人は見掛けによらぬもので、貴公は年甲斐もなく、若

い女にでも係り合つて、その始末に困つた揚句が、留守をつかつて奥にかくれて……。

いや、呆れた男だ。

能因。いや、いや、そんな洒落れたわけでもない。實は近頃わたくしが歌をよみました。

節信。貴公は名高い歌よみだ。定めて面白い歌であらう。して、その歌は……。

能因。唯今お目にかける。お待ちください。

(能因は棚の箱から色紙を持つてくる。節信はうけ取りて讀む。)

節信。都をば霞と共に出でしかど、あき風ぞ吹く白河の關。む、(感心してゐる。)

能因。どうでせうな。都をば霞と共に出でしかど……。

良因。秋風ぞふく白河の關。(大きく云ふ。)

能因。これ、静にしろと云ふに……。表に誰も聞いてゐないか。

良因。あ、來ました、來ました。(向ふを指さす。)

能因。え。(おどろいて起つ)ほんたうに來たか。來たか。(奥へ逃げ込もうとする。)

良因。は、は、は。

能因。こいつ又かついだな。忌々しい奴だ。(安心して坐る)ほんたうに冗談は抜きにして、眞面

目にそこらを見張つてゐろ。

良因。は、大丈夫でございます。

節信。(色紙を繰返してよむ)いや、天晴れの秀逸、あき風ぞ吹く白河の關は面白い。今更ではな

いが、節信もほとく感心いたしました。

能因。さあ、そこでござるて。わたくしも折角それだけの秀逸を浮びながら、唯つまらなく世に

出しては、人がそれほどに賞美してもくれまいと存じて、色々に工夫をいたした。

節信。なるほど、成程。して、その工夫は……。

能因。その工夫がなかくむづかしい。この良因とも相談いたして、色々に肝膽を砕いた揚句が

今度の旅で……。みちのくへ歌枕見にまると世間へは立派に披露して、實はこの春から我家の奥に隠れてました。(頭をかく。)

では、陸奥ではなくて家の奥に隠れてたのか。いや、するい男だ。わしもこれには一杯食はされた。は、は、は、は。

もし、節信様。家のお師匠様ばかりではございません。室内旅行はこの頃の都の流行物でございませよ。

そこで好い頃を見はからつて、能因は奥州の旅から歸つたと披露すれば、大勢の人があつまつて来て、さて道中は如何でござつた。奥州名物の信夫文字摺、野田の玉川、あさかの沼、鹽釜櫻御覽じたかなどと云ふ。こつちは得たり賢しと、勿體らしくこの歌を持ち出して、あき風ぞ吹く白河の關……。いかにも實地を歌つたやうにきこえて、みんなも一入感心いたす。おなじ歌でも斯うして世に出せば十段も價值があがつて、人の信仰も又格別といふもの。

(呆れる。)これはいよく驚いた。風雅の歌人とみせかけて、貴公も案外の山師だな。風流專一の歌よみでも、このくらゐの駈引をいたさねば、今の世の中は渡られませんよ。

節信。  
能因。

が、こゝに唯一つ困つたのは……。わが顔を指さす。色を黒くすること……。なにしろ都から奥州まで百里二百里の長い道中をしたといふからには、顔も手足もずるぶんに燻けてゐる筈。そこで又わたくしは工夫を致した。表向きは留守と云つて、奥の一間に隠れてゐながら、人の見ない時をうかつて、毎日あの窓から首を出して、まるで生きた獄門も同様、あさ日ゆふ日に晒されてゐました。能因が眞黒な顔のいはれはこの通り……。は、て、お笑ひなさるな。當人はそれでも一生懸命でござつたよ。(ふき出す。)いや、もう何とも御挨拶ができぬ。あゝ、貴公は智慧者、世捨人には惜いものだ。

ちつと智慧をお貸し申さうか。は、は、は、は。  
は、は、は、は。

(この時、良因は又もや向ふを指さして騒ぐ。)

もし、お師匠様。來ました、來ました。  
え、ほんたうか、ほんたうか。

今度こそは嘘いつはり無し、たしかに二人づれがこつちへ歩いてまゐります。おゝ、それ、

能因法師

節信。  
能因。  
良因。  
能因。  
良因。

それ、ひとりは歌自慢の加賀といふ生意氣な當世女、もう一人は花園の少將殿らしく見えますが……。

節信

あの二人はかねて戀仲だと聞いてゐるから、幸ひ今日は日和もよし、手に手ひかれて秋の野邊を、そゝろ歩きなどしてゐると見えるな。

能因

それはむかうの勝手だが、こゝへ押掛けて來られては甚だ迷惑。(たち上る)これ、良因、もしも二人がこゝへ來たらば、おれはまだ奥州から戻らぬと云ふのだぞ。いゝか。それは萬事心得てをります。

良因

能因

こんなものを見つけられては大變だ。  
(節信より彼の色紙を取返して、料紙箱にしまひ込む)

節信

少將殿がこゝへまゐられては會釋などが面倒だ。わしもこれでお暇といたさう。(庭に降りる)

能因

あ、ちよいとお待ち下さい。折角おたづね下されたのだから、お土産によいものを差上げませう。

(能因は袂より小さき鉈屑を取出し、懷紙にのせて勿體らしく出す)

節信

(うけ取りて不思議さうにみる) これは鉈屑のやうだが……蚊いぶしには餘り輕少過ぎる。(摘んでみる)さりとて飯の菜にもなるまい。これは一體どうするので……。

能因

節信殿ほどの御人でも、おそらくは御存じあるまい。それは日本に二つとない珍らしいもの。雉子も鳴かずば撃たれまいと歌はれて、むかしから有名の長柄の橋。

節信

む。その橋を作つたときの鉈屑で……。

能因

いや、天下第一品、これは恐れ入つた。さすがの節信も生れてから初めて見ました。しかしかやうな珍しいものを頂戴しては、こつちでも何か御返禮をいたさねばなるまい。(ふとこゝろを探つて舌打する)かうと知つたら持參するものを、生憎に家へ置き忘れてまゐつた。では、後刻かさねて……。

能因

決して義理堅い御返禮には及びません。あれ、あれ、もう二人がまゐります。

節信

さうか。さうか。  
(節信はあわて、門に出て、向ふをみる)

能因法師

節信。 おゝ、なるほど、来た、来た。今度は嘘でない。能因殿、早く姿をかくさぬと化の皮があらはれますぞ。

能因。 はい、はい。良因、いゝか。たのんだぞ。留守と云へ、留守といへ。

(能因はあわて、奥に逃げ込む。節信は向ふへ行きかけしが、更に路をかへて下の方に入る。)

良因。 はゝ、節信殿も面白い人だ。長柄の橋の鉤屑にはひどく恐れ入つて歸つたが、あの人のことだから、きつと負けない氣になつて、なにか又不思議な古物を持つてくるに相違ない。

浦島の乗つた龜の甲だとか、八股の大蛇の尻尾だとか名をつけて、飛んでもないものを擔ぎ込んで来るだらう。なにしろ、家のお師匠様とは好い取組だ。はゝゝゝ。

(良因は再び庭を掃く。向ふより花園少將、二十餘歳。院の女房加賀、廿歳ぐらゐにて、手に野菊の枝を持ち、むつまじげに連立つて出づ。)

花園。 よい日和であつたなう。

加賀。 山には紅葉、野には菊、きのふけふは秋の色もだんくりに増してまゐりましたな。

花園。 さうぢや。さうぢや。秋の野山もこれからが面白い晴。さつきから其處らを果しもなくあるいたので、足も大分くたびれた。

加賀。 何處かそこで一休み致しませう。おゝ、あそこが宜しうございます。

花園。 あの庵室めいた草の家は誰の住居かの。

加賀。 御存じはございせんか。あれは能因法師の宿でございます。

花園。 なるほど、わしも一二度立寄つたことがある。あるじの能因は陸奥の旅に出て、まだ歸らぬとか聞いてゐるが、誰か留守居の者があらう。

加賀。 良因といふ暢氣なお弟子坊主が留守番をしてゐますから、休みながら何か面白い話でも聞きませうよ。

(二人は門にくる。)

加賀。 良因さん。大層お掃除に精が出ますね。

良因。 や、これは加賀どの。おゝ、花園の少將殿も御一緒にございましたか。さあ、さあ、どうぞこちらへ。

(花園と加賀は庭に入る。)

花園。 おゝ、主人は留守ぢやと聞くに、庭の手入れはなかく行届いてゐるの。

良因。 いえ、もう、毎朝やかましく叱られますので……。

能因法師

加賀、え、誰に叱られるの。

良因、(あわてる。)え、何、其、これまで毎朝吐られてるた癖が付いてるので、師匠が留守でもこの通り綺麗に掃除をしてをります。

花園、かけひなたがなくて感心な男ぢや。

良因、なんでも人間は正直が肝腎でございます。(傍を向いて笑ふ。)

花園、小半日も歩いたせるか、喉が渴いて来た。湯を一杯振舞つて貰へまいか。

良因、はい、はい。唯今すぐに沸かして差上げませう。先づこれへお掛けくださいまし。

(花園は縁に腰をかける。良因は内へ入りて、爐に枯枝を焚きつける。加賀は垣のそばに立ちて、草花などをながめてゐる。蟲の聲きこゆ。)

花園、お、もう日が暮れか、つて来た。

良因、あきの日は短うございますよ。

加賀、こゝらではまだ蟲の聲がきこえますね。

良因、夜になるときりくすが枕邊でも鳴いてをります。

花園、それは一入風流なことぢや。どうぢや、加賀。嵯峨野の秋のゆふべを題にして、お得意の

歌でもよまぬか。

加賀、この頃は何だかうはくしてゐて、歌を詠まうなどと云ふ氣分に些ともなれませんの。

花園、では、もう歌はお止めか。

加賀、止めるもんですか。今に日本一の歌よみになるんですもの、ほ、ほ、ほ。お、それ、そ

れ、その歌で思ひ出しました。何日は云はう云はうと思ひながら、つい延びくになつてゐたのですが、ねえ、あなた……。妾、少しあなたに折入つてお願いがございますの。

花園、あらたまつて何ぢやの。い、着物でも欲しいといふのか。(笑ふ。)

加賀、い、え、そんなことぢやございませぬ、びつくりしちやあ不可ませぬよ。(花園のそばに來

て腰をかける。)あなたとは斯うして二年越しも仲好くしてまゐりましたが……。あの、今日かぎりでもう赤の他人になつて頂きたいんですが……。

花園、え。(おどろいて起つ。)だしぬけに何、何故そんなことを云ひ出したのぢや。なにか氣に障

つたことでもあるのか。譯を聞かう、わけを云やれ。(詰寄る。)

加賀、まあ、お待ち下さいまし。あなたは親切過ぎるくらゐに優しくして下さるんですもの。氣に障るやうなことは幾ら探したつてありやあ致しません。愛想づかしの種が無くつて困つ

てるるくらるでございませすわ。

花園。

それならば不足はない筈、なぜに縁を切らうと云ふのぢや。わからぬな。

加賀。

あなたには判らなくつても宜しいんです。ねえ、あなた。どうぞ他人になつてやると唯一言おつしやつて下さいよ。

花園。

藪から棒にそれは無理ぢやよ。

加賀。

無理は初めから承知の上でございませすよ。(たち上る。)

花園。

(慌て、ひき止める。) いや、おまへは兎角に我儘をいふが、それは宜しくないぞ。よく其譯を聞かぬうちに、無暗にこの返事がなると思ふか。積つてもみやれ。では、譯を申したら承知してくださいませね。

加賀。

さあ、そのわけを聞いた上で、なるほどと此方の腑に落ちたら兎も角も……。

花園。

兎も角もではいけません。屹と承知すると仰しやつて下さい。ようございませすか。

加賀。

まあ、仕方がない。よし、よし。(澁々ながら首肯。)

花園。

(再び腰をおろす。) その譯といふのは先づ斯うでございませす。わたくしは去年の丁度今頃、

加賀。

ふいと斯んな歌を思ひつきました。

良因。

え。(思はず乗出して聴く。)

花園。

その歌は……。

加賀。

かねてより思ひしことよ伏柴の、樵るばかりなる歎きせんとは。

花園。

かねてより思ひしことよ伏柴の……。

良因。

樵るばかりなる歎きせんとは……。

花園。

(かんがへる。)むむ。面白いなう。

良因。

面白い歌でございませすな。(ひどく感心する。)

花園。

云ふまでもなく戀歌ぢやが、男に捨てられた時の心を詠んだものゝやうに思はれるの。

良因。

(いよゝ乗出してくる。)左様、左様。おもふ男に捨てられた時に、あゝ、大方こんなことになるだらうと思つてゐたと、しみじみ歎息するやうな女心のあはれさが窺はれますな。

加賀。

それですから色々考へたのでございませす。(起つてあるく。)折角これだけの名歌を思ひ附いたからには、なんでもこれは戀人をこしらへて……それもなるだけは身分の好い、世間

名を知られたお方を相手にして……中途で其人に捨てられる。さあ、その時に初めてこの歌を披露すれば、ほんたうにわたくしの心の底から絞り出されたやうに思はれて、あゝ可

良因。加賀。

哀さうにとみんなが屹と感心しませう。なるほど、なるほど。いや、似寄つた話もあるものだ。え。

良因。花園。加賀。

なに、こつちのことです。世間の男どもは屹とさう云ふ女に同情して、わい／＼褒めちぎるに相違あるまい。わしも随分覚えのあることぢや。

加賀。

良因。花園。加賀。

さうなればわたくしは、この歌一つのために忽ち世間に名がひろまります。さあ、世間でなんと云ひませうかねえ。かねてより思ひしことよ伏柴の……では、伏柴の加賀とでも申しませうかな。伏柴の加賀……。風流な名ぢやなう。

加賀。

さう、さう、伏柴の加賀……。屹とみんなが然う云ひませう。(縁に腰をかける) さうしてそれが都は勿論、遠い陸奥から筑紫の果までも傳はつて、伏柴の加賀といへば日本に隠れない才女、あつばれの歌よみだとみんなが褒めそやすに相違ございませぬ。さうなれば本望ですわ。

花園。加賀。

いや、わかつた、判つた。それでわしに捨てられたいと云ふのぢやな。

花園。

あなたに捨てられなければ、いつまで経つてもこの歌を世に出すことが出来ないで、つまり寶の持腐れになつてしまふぢやあございませぬか。わたくしは去年あなたと戀した始めから、けふは捨てられるか、あしたは捨てられるかと、捨てられるのを待つてゐたのです。では、わしと戀をしたのも、その歌を世に出すための手だてであつたのか。いや、これはおどろいた喃。

加賀。

それですから、こゝらであなたに捨てられると、萬事が都合よく参ります。ね、さうでせう。わたくしがあなたと戀する。さうして、あなたに捨てられる。そこでこの歌を披露すれば、誰だつて偽らざる告白だと思ひませう。

花園。

なるほど、自分の名を賣擴めるにはよい工夫ぢや。あなたも感心なすつたら、この通り……。手に持つ花を捨てる。わたくしを打つちやつて下さるでせうねえ。早く返事をなさいよ。もう日が暮れますわ。

花園。

これはあんまりぢや。困つた喃。(途方にくれてゐる。)

良因。

これは内のお師匠よりも又すつと上手だ。(感心する)なるほど、この頃の女はえらいもの



だ。

花園。

しかし物は相談ぢやが……。 (加賀の手を取つて糸瓜の棚の下にくる。) 先づ一旦はおまへの望み通りに、わしはお前をふり捨てる。むごく情なく邪慳に振捨てる。おまへが一月ばかりも泣いて暮す。そこでその伏柴の歌を披露して世間の奴原をさんぐ感心させて置いて、もう好い頃と思つたら、ふたりが元の通りに縋りを戻すと、かういふ趣向にはゆくまいかの。

加賀。

(花園の手をふり拂つて縁の方へ来る。) それも悪くはございませぬが、今から確にお請合はできませんね。だつて、かんがへて御覽なさいまし。わたくしが伏柴の加賀と名を知られるやうになれば、世間の若い人たちが屹と打ちやつては置きますまい。方々から戀歌や色文が雨のやうに来るでせう。百夜通ひの眞實をみせる人も出て来るでせう。さうなると、わたくしも色々に氣が迷ひますわ。(縁に腰をおろして考へる。)

良因。

いや、御もつとも、御もつとも。さうなるとなかく目移りがして、うつかり決めるわけには行きますまい。

花園。

(悲しい聲。) では、どうでもこれぎりか。

加賀。

御縁があつたら又かさねて……。 (たち上る。)

花園。

いや、情ないことになつてしまつた。かうと知つたら、わしも何か悲しさうな歌を作つて置けばよかつたが、生憎にわしは歌が下手ぢや。いつそ其歌をこつちへ譲つてくれるわけには……。

加賀。

御冗談仰しやつちや不可ませぬよ。あら、あなた、涙ぐんでいらつしやるの。あなたも随分男らしくないわねえ。(笑ふ。)

花園。

お前もあんまり女らしくはあるまいぞ。やれ、やれ、とんだ目に逢ふものぢや。(歎息する。)

良因。

(慰めるやうに。) 今時の女と戀をなさるからは、遅かれ速かれこんなことになるよ云ふ御覺悟がなければなりませんよ。かねてより思ひしことよ伏柴の……。

花園。

樵るばかりなる歎きせんとは……。 あ、情ない。しかし名歌ぢや、よく詠んだ。

加賀。

(又笑ふ。) あなたは泣きながら感心していらつしやるの。をかしうござんすわねえ。ほ、ほ、では、もうお暇をいただきますよ。

(加賀は行きかゝるを、花園は駈寄つて袂を捉る。)

花園。

まあ、さう現金にしないでもよさうなものぢや。せめて名残にもう少しこゝで話して行

加賀。

つてもよいではないか。

良因。

さう事がきまりましたら、一刻も早い方がよろこびます。これから歸路に二三軒廻つて、この歌を吹聴して來ようと思ひますから……。(振切つて行きかゝる。)

加賀。

あ、もし、もし、それほどお急ぎならば、こゝに色紙も短冊もあります。寧ろこゝで二三枚かいて行つたら早手廻しでせうが……。

良因。

それは丁度都合が好いこと。それぢやあ二三枚書かしてくださいな。

加賀。

さあ、御遠慮なく……。筆も硯も今持つてまゐります。  
(良因は糊より筆、墨、硯、色紙、短冊などを持ち來る。加賀は縁に腰をかける。)

花園。

さあ、澤山お書きなさい。五枚でも十枚でも百枚でも……。

加賀。

もういつの間にか日が暮れて、手下が薄暗くなつて來ましたね。(花園に)あなた、濟みません、墨を磨つて下さいませんか。

はい、はい、かしこまりました。  
(花園は墨を磨る。加賀は筆を執つて色紙に歌をかく。良因も首を出して見てゐる。このうちに奥の襖を物と明けて、能因も顔を出してのぞく。)

加賀。

先づこれで二枚書けましたわ。(云ひつゝ不圖能因の顔を見ておどろく)あれつ。

花園。

え。(これも見かへりて驚く)やあ。

良因。

(ふたりは驚きて庭に飛び降りる。能因もあわて、襖をしめる。)  
(きよろくして)もし、どうしたのでございませう。天井から壁虎でも落ちてまゐりましたか。

花園。

壁虎どころか。あ、あの襖のうしろから化物が……。

良因。

え。化物が……。あの奥から……。

加賀。

眞黒な顔をして眼ばかり睨つた大坊主が……。いつの間にかすうと首を出して……。

良因。

眞黒な大坊主が……。 (噴出しさうになるのを、やつと吞込んで眞面目な顔) はあ、さうでございませうか。それは不思議……。 (わざと考へる) 一體それは何者でございませうかな。

花園。

わしにも判らぬが、大方は化物ぢや。(扇を持直して身がまへする。)

加賀。

左もなければあんな所から眞黒な首を出す筈がありませんわ。(顔へる)ねえ、あなた。どうしたら可いでせう。

花園。

古い家には鬼が棲むといふが、まつたくそれに相違あるまい。あるじの留守を窺つて、鬼

良因。めがいつの間にか入込んだとみえる。(良因に)これまで別に怪しいことも無かつたかの。  
 (眞面目で)いや、さう云へば此頃はとき／＼に不思議なことが無いでもございませんでした。どうかすると奥の方で、うはゞみのやうな大きな駟の聲がきこえます。  
 加賀。まあ。

良因。それから天氣の好い日には、あの窓から眞黒な大坊主の首がぬつと出ます。  
 花園。それぢや、それぢや。今そこに現はれたのは確にそれぢや。こりや飛んだところに来あはせた喃。(鐘の聲きこゆ)おゝ、鐘が鳴る。今が逢魔が時といふのぢや。

加賀。ですから、わたくしは早く歸らうと思つたのに、あなたが無理にお止めなすつたもんですから……。あゝ、こんな處へ來なければよかつた。なにしろ、早く逃げませうよ。  
 花園。さうぢや、さうぢや。

良因。(二人は逃支度をする。良因は縁を降りて止める。)  
 (可笑さを隠して)もし、もし、わたくし一人をこゝへ置き去りにして、あなた方ばかり逃けて行かうとはあんまり情なうございます。  
 花園。いや、いや、もう一刻もこんな處にはゐられない。加賀、早う來やれ。

良因。いえ、あなた方もかゝり合でございます。滅多にお歸し申すことはなりません。

花園。(二人は逃げようとするのを、良因は意地わるく止める。この悶着のうちに花園は向ふを見る。)  
 や、よい人が見えたぞ。あれ、あれ、あすこを阿部正親殿が通る。

良因。あれは都にかくれの無い陰陽師ぢや。一體この家の奥には鬼が棲むか蛇が棲むか、占つて貰はうではないか。

加賀。それがようございます。早くこゝへ呼びませうよ。  
 (少し困る)いえ、それにも及びますまい。  
 花園。まあ、兎もかくも呼んでからのことぢや。おうい。  
 加賀。おうい。

正親。(二人はしきりに呼ぶ。陰陽師阿部正親、御幣を持ち出て出づ。)  
 花園。はてな。わしを呼ぶのは何處か知らん。若い男と女の聲ぢやが……。 (前後を見かへる。)  
 加賀。おうい。

正親。

はてな。やつぱり判らぬ。(考へる)お、好いことがある。これぢや。(御幣を地に立て、その倒れたる方を見て首肯)は、あ、これを眞直にまゐれといふ神の御告げぢや。ありがたい、有難い。

(正親は再び御幣をいたゞいて、この家の門にあゆみ来る)

花園。

お、正親どの。よくぞお出でくださった。

正親。

少將殿に加賀殿。これは能因法師の宿ではござらぬか。

加賀。

左様でございます。まあ、どうぞこつちへお通り下さいまし。

正親。

はい、はい。(庭に入る)そこで、わたくしに何ぞ御用でもござるかの。

花園。

主人の能因が旅の留守に、この家にさまざまの不思議が起りました。

正親。

はてね。

加賀。

あの奥の間に怪しいものが棲んでゐて、時々眞黒な顔を出すのでございます。一體あれは何者か、あなたに占つて頂くわけには参りますまいか。

正親。

それは雑作もないこと。わたくしは御存じの通り、陰陽博士阿部晴明が一の弟子、たとひ如何なる不思議がござらうとも、私がかならずその正體を見あらはして進ぜます。し

て、その不思議といふのは、あの奥の一間のうちでござるか。  
まあ、そんなやうな譯でございますが、失禮ながらあなたの御うらなひで、あの化物の正體が判りませうかな。

正親。

御念にはおよばぬ。今に奇特を見せますぞ。

(正親は縁に上りて、上の方の襖にむかひて坐し、うやくしく御幣をさゝげて祈る。花園と加賀は一心に打守りある。家のうしろを回りに来りし心にて、下の方の垣の外に能因忍び出づ。)

能因。

(小聲)良因、良因。

良因。

え。(左右を見まはす)

能因。

こゝだ、こゝだ。

良因。

え。(拔足して垣の傍にくる)どうしてこんな處へお出でなさいました。

能因。

貴様が詰らないことを云つて嚇すものだから、陰陽師などが遣つて来て、何だかあぶな

良因。

うになつて来たから、そつと裏口から拔出して来たのだ。  
なにしろ、あいつの立去るまではそこらに隠れてお出でなさいまし。(云ひつゝ、下の方を見

る)や、大變。誰かまた此方へ来ました。

能因法師

能因。

来たか、来たか。(あわて、家のうしろに隠れる。)

(この中に正親は祈り終りて不思議さうな顔。)

正親。

はて、わからぬ。世には不思議なこともあるものぢや。

花園。

お判りになりませぬか。

正親。

この一間のうちには何にも居らぬやうぢやが……。 (かんがへる。)

加賀。

なんにも居りませんか。

正親。

内は空虚ぢや。藻抜の殻ぢや。鬼も人も棲んでゐるやうに思はれぬ。はてなう。

良因。

(空呆けて。)でも、唯つた今たしかに眞黒な大坊主が首を出しましたが……。ねえ、お二人様。

花園。

さあ、たしかに出たやうに思はれたが……。

加賀。

わたくしも確に見ましたわ。どうかもう一度占つて見てくださいませんか。

正親。

いや、幾度占つても同じことぢや。

加賀。

當るも八卦、あたらぬも八卦とか云ふこともありますから、念の爲にもう一度……。

正親。

(居直る。)これは怪しからぬことを申さるゝ。當るも八卦、あたらぬも八卦とは何事でございます。

る。身不肖ながら正親は、大道占ひのたぐひではござらぬぞ。當時日本にかくれなき陰陽

博士阿部晴明が一の弟子……。

加賀。

それはもう判つてゐますよ。

正親。

その正親が有るといへば有る、無いと云へば無い。それを疑ふは神をうたがふも同じこと

加賀。

でも、現在奥にゐる者の正體が判らないぢやありませんか。

正親。

いや、判つてゐる。なんにも無いと判つてゐるぢや。

加賀。

なんにもない筈はありませんよ。

(この争ひの中に、下の方より花園の奥方園生出て来りて、垣の外より窺ふ。)

花園。

まあ、兩方でさう赤め合つても仕方があるまい。この奥に何がゐるか居ないかは、襖をあ

良因。

(わざと逡巡して。)いえ、それはまつびら御免下さいまし。

花園。

まだ怖いか。

良因。

なんだかまだ不安心でございます。どうかあなた御自身で……。

能因法師

花園。いや、わしも御免ぢや。

加賀。誰だつて氣味が悪うございますわ。たしかに變なものがあるに違ひないんですもの。

正親。(いよく怒る。) まだ私を疑つてゐるのか。いよく以て怪しからぬことぢや。さう云ふこ

なたこそ鬼か悪魔ぢや。

加賀。え、なんですつて……。わたしが鬼か悪魔ですつて……。

正親。お、此頃の女子は悪魔よりもおそろしいと、師匠の晴明どのが常々申されてゐるわ。

良因。なるほど、その占ひはよく中つてゐるかも知れない。(笑ふ。)

加賀。ひとを馬鹿におしなされるな。なんでわたしが悪魔ですよ。(詰寄る。)

正親。神の御告をあざける徒は悪魔も同然ぢや。退れ、すされ。(御幣にて加賀を打つ。)

加賀。おや、わたしを打ちましたね。

正親。かうして悪魔を攘ふのぢや。(又打つ。)

加賀。わたしを狐だとも思つてゐるんですか。もう堪忍ができませんよ。

(加賀は正親の御幣を奪ひ取りて、あべこべに打つ。正親の烏帽子落ちる。正親怒つて御幣をうばひ返さんとし、たがひに揉み争ふ。)

花園。まあ、まあ、喧嘩をしては困る。これ、良因。見物してゐないで早く止めてくれぬか。

良因。はい、はい。(笑つて見てゐる。)

加賀。なんの、男に負けてたまるものか。

(御幣にて正親を又打つ。正親いよく怒りてむしり合ふ。花園は制し兼ねてうろくしてゐるところへ、園生は走り入る。)

園生。(花園の胸倉をつかむ。) もし、あなた。なんでこんな處へ這入り込んでゐるんです。又この生意氣な、歌自慢のおしやらく女と一緒に、こゝらをうろつき歩いてゐるんでせう。さあ、さあ、早くお歸んなさい。(無理無體に引立てる。)

花園。まあ、待つてくれ。こつちには色々の事件が起つてゐるのぢや。お前などの來るところではない。早く歸れ。

園生。あなたこそ來る處ぢやありませんよ。さあ、わたしと一緒にお歸んなさい。(小突く。)

花園。まあ、待つてといふのに……。

園生。いゝえ、待たれません。

(いゝにも花園夫婦の喧嘩がはじまる。)

良因。いや、喧嘩が二組になつた。面白い、面白い。(笑つて見物してゐる。)

(二方の正親は加賀をおさへ付けてはつと一息つく。)

正親。さあ、どうぢや。正親のうらなひが中つたか、外れたか、現在の證據をみせてやるわ。

(加賀を突き放して、上の襖をがらりと明くれば、内から能因は再び眞黒な顔なぬツと出す。出進がしちに正親はあツとおどろいて飛び退く。加賀は顔を掩うてうつ伏す。花園も園生もきやつと云つて逃げ退く。園生は倒れながら花園にすがる。)

園生。もし、あ、あれは……。な、なんでございます。(顫へる。)

花園。な、なんぢや知らぬが、もう斯うしてはゐられないのぢや。(逃げかゝる。)

園生。(一生懸命に纏る。)(どうぞわたしも一緒に連れて行つて下さいまし。足が顫へてもう一足も歩かれませんか。)

(正親は御幣を投げ出して逃げ去る。花園もいよく悸えて逃げかゝれば、園生は縋りながら引摺

能因。わは、ハ、ハ、ハ。(高く笑ふ。)

加賀。(泣聲)それ、御覽なさいな。出て来たぢやありませんか。

正親。こりやたまらぬ。大變ぢや、大變ぢや。

られてゆく。)

園生。もし、あなた、あなた……。

花園。何でもいゝから、早く、早く……。うつかりしてゐたら鬼一口に啖はれうぞ。

園生。え。

(又べつたりなるを、花園は扶け起して逃げる。)

花園。さあ、早く、早く。

(花園夫婦はこけつ轉びつ逃げ去る。)

良因。あは、ハ、ハ、ハ。

能因。わは、ハ、ハ、ハ。

(二人は腹をか、へて笑ふ。加賀は怖々ながら透してみる。)

良因。お師匠様。いや、面白いことでもございました。

能因。面白かつたな。おれも陰陽師が来たと聞いて、一旦は裏口へ逃げ出したが、喧嘩があんまり面白いで、又引返して覗きに来たら、だしぬけに襖をがらりと明けられたには驚いたよ。併しみんな弱い奴等だ。おれの眞黒な顔におどろいて命からく、逃けてしまつた。は

能因法師

は、ムムム。

加賀。

能因。

加賀。

良因。

能因。

良因。  
能因。

あら、あなたは能因さんぢやありませんか。まあ、人が悪い。妾、どんなにびつくりしたか知れませんか。良因さんも同腹になつて、わたし達を嚇かしたのね。随分ひどい。いや、嚇かしたと云ふわけではないが、自然に物がかう間違つて来たので……。まあ、まあ、堪忍してください。

ほんたうに悪い洒落ですわ。妾、胸がまだとき／＼することよ。では、お湯を一つ……。丁度今沸きました。(湯を汲んで出す。)

しかし世の中はおそろしいものだ。わたしは「秋風ぞふく白河の關」の歌を世に出すために、これだけの苦勞をしてゐると、どうして、世間には又あなたのやうな上手がある。「伏柴の樵るばかりなる」といふ歌一つを世に出すためには、若い女が自分の美しい顔や黒い髪や、柔かい肉體を資本に、わざ／＼ほかの男と戀をして、それを踏臺に自分の名を賣ひろめようとは……。おい、良因、なるほど今の世渡りはむづかしくなつたな。

とても女にはかなひませんよ。實に物すごい事でございます。

おれの化物よりも餘つほど凄いぞ。あ、怖ろしい、おそろしい。實に怖ろしい世の中だ

……。

加賀。

能因。

加賀。

能因。

加賀。

能因。

加賀。

能因。

加賀。

良因。

加賀。

能因。

能因法師

では、あなたも自分の歌に勿體を付けるために、奥州へ旅行するなどと嘘をついて、内に隠れてゐるたんですか。まあ。何がまあだ。あなたが花園の少將と戀をしたのと同じことですよ。わたしの黒くした顔は、もう一度白くなる時もあるだらうが、あなたの身體は汚れたが最後、もう綺麗にはなりませんぜ。

(笑ふ)そんなことは何うでも構ひませんよ。どうで女の戀といふものは一生に一度で済みやあしませんわ。

さあ、それだから怖ろしいと云ふのだ。では、いづれ近い中にあなたの歌が世に出るのですね。

感心して褒めちぎる奴の顔が見たうございますよ。

え、一日も早く世に出してみんなに褒められたいと思ひますわ。かねてより思ひしことよ伏柴の、樵るばかりなる歎きせんとは。あなたのも何れ出るんでせうね。

もう斯うなつてはぐづくしちやあるられません。あしたにも歸つたことにして、私ます



加賀。

ぐに披露(ひら)させう。都(みやこ)をば霞(かすみ)と共に(い)出(い)でしかど、秋風(あきかぜ)ぞ吹(ふ)く白河(しらがは)の關(せき)。

良因。

どつちを人(ひと)が褒(ほ)めるでせうね。世間(よ)には随分(ずいぶん)あわて者(もの)が多い(おほ)から、どつちも同じ(おな)じやうに擔(か)ぎ上(あ)げること(こと)でございませうよ。

加賀。

お、すつかり暗(くら)くなつて來(き)ました。どれ、燈火(あかり)をつけませうか。(奥(おく)に入る(い)る。)

能因。

併(し)しこの秘密(ひみつ)はおたがひに洩(も)らしますまいね。後日(ごじつ)に露顯(ろけん)すれば鬼(おに)もかくも、當分(たうぶん)は何事(なにごと)も窃(ひそ)かに、ひそかに……。

加賀。

ほんたうに然(さ)うですわ。

節信。

(下(しも)の方(かた)より藤原(ふぢはらの)節信(せしん)は松明(たいまつ)を持ち(も)ちて急(いそ)ぎ出(い)づ。)

能因。

頼(たの)む。たのむ。

節信。

あ、また誰(たれ)か來(き)たか。

良因。

(能因(のういん)はあわて、奥(おく)に逃(に)げ込(こ)む。引(ひ)き違(ちが)へに良因(りやういん)は燈臺(とうだい)を持ち(も)ちて出(い)づ。)

良因。

はい、はい。どなた……。

節信。

(急(いそ)ぎ入(い)る。能(のう)……。(云(い)ひかけて加賀(かが)を見返(みかへ)り、あわて、口(くち)をつぐむ。)

良因。

いえ、御遠慮(ごえんりよ)には及(およ)びません。この御婦人(ごふじん)はこつちよりも上(う)手(て)なのでございませうから……。

さの、どうぞお上(あ)り下(くだ)さいまし。

(能因(のういん)は奥(おく)より出(い)る。)

能因。

お、節信(せしん)どの。又(また)お出(い)でなされたか。

節信。

早速(さつそく)ながら先刻(せんこく)の御返禮(ごへんらい)にまゐつた。

良因。

大方(おほ)さうであらうと存(ぞん)じましたよ。

節信。

長柄(なががら)の橋(はし)の鉋屑(かんなくづ)といふ天下一品(てんか)の古物(こぶつ)を頂戴(ちやうたい)したからには、こちらでも相當(相當)の御返禮(ごへんらい)をい

節信。

たさねば相成(あひな)るまいと、早々(さうさう)に屋敷(やしき)へ立戻(たちもど)つて、かやうなものを持参(もっさん)いたした。どうぞ御

節信。

受納(じゆなふ)をねがひたい。(ふところより紙(かみ)づつみを出(い)す。)

能因。

これは義理(ぎり)のお固(かた)いこと。貴公(きこう)の御返禮(ごへんらい)とあれば定(さだ)めてお珍(めづ)らしいものでござらう。早速(さつそく)

能因。

拜見(はいけん)……。

加賀。

(能因(のういん)は紙(かみ)づつみを披(ひら)く。加賀(かが)も良因(りやういん)ものぞいて見(み)る。包(つみ)の中(なか)よりは干(ほ)した蛙(かへる)が一匹(ひとひき)出(い)る。)

能因。

あら、忌(い)だ。まあ、こんなものを……。

良因。

これは蛙(かへる)の干物(ひもの)のやうでござるな。

能因。

いくらお師匠(ししやう)様が惡物(あくもの)食(た)ひでも、ひきがへるの干物(ひもの)は召上(めしあ)りますまい。

能因。

能因法師(のういんほうし)

節信。

(自慢らしく)それは井出の玉川の蛙でござる。

能因。

は、あ、成程。むかしから歌によむ井出の玉川の蛙でござるか。(蛙の足を摘まんでぶらまげて見る。)いや、これはお珍しいものを有難うござる。世間には随分書畫骨董を珍重いたす人も澤山ござるが、蛙の干物までは手がとぎまますまい。骨董趣味もこゝまで進まねば話せませんな。

加賀。

まあ、ばか／＼しい。鼻の缺けた観音様や、蟲の蝕つた繪巻物の穿索で足りないで、かな肩や蛙の干物まで大事にするとは……。これを思ふと骨董趣味なんて云ふものは、つまり狂人の道楽ですわねえ。

節信。

なに、狂人だと……。これは怪しからん。

能因。

まあ、まあ、よろしい。兎かく今の人には喧嘩が好きで困る。

加賀。

だつて、あんまりばか／＼しいんですもの。そんな干枯びた穢いものを……。

能因。

干枯びて穢いもの……。あなただつて何日まで若くつてはゐない、やがてこんな干枯びた……。(蛙を眼のさきへ突き出す。)

加賀。

あれ、忌てすよ。(飛び退く。)

狂人は狂人

能因 はムムムム。

幕

綺堂戲曲集(第一卷)終

大正十三年五月廿二日印刷  
大正十三年五月廿五日發行

綺堂脚本集第壹卷  
(定價金貳圓參拾錢)

印檢者作著



著者 岡本敬二

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷者 堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地

印刷所 常磐印刷所

發行所 春陽堂

東京市日本橋區通四丁目五番地  
(電話大手五・四二一七)  
(振替口座東京一六一七)

文藝書類

夏目漱石著 ■ 虞美人草 (長篇作)	同 著 ■ 草合 (長篇集)	同 著 ■ 三四郎 (長篇作)	同 著 ■ それから (同)	同 著 ■ 門 (同)	同 著 ■ 鶉籠 (長短篇集)	同 著 ■ 肉塊 (長篇作)	谷崎潤一郎著 ■ 相互扶助論 (原クロボトキン著)	大杉榮譯 ■ 革命家の思出で (原クロボトキン著)
送料圓十二錢	送料圓十二錢	送料圓十九錢	送料圓十九錢	送料圓十九錢	送料圓十九錢	送料圓十九錢	送料圓十九錢	送料圓十九錢

文藝書類

正木不如丘著 ■ 診療簿餘白 (短中篇集)	同 著 ■ 三前 (長中篇集)	同 著 ■ 法醫學教室 (短中篇集)	同 著 ■ 三太郎 (長篇作)	長田幹彦著 ■ 祇園 (短篇集)	同 著 ■ 大地は震ふ (同)	同 著 ■ 港の唄 (長篇作)	菊池寛著 ■ 新珠 (同)	高山樗牛著 ■ 瀧口入道 (同)
送料圓十二錢	送料圓十二錢	送料圓十二錢	送料圓十二錢	送料圓十七錢	送料圓十五錢	送料圓十五錢	送料圓十六錢	送料圓十八錢

類書藝文

島崎藤村著	佛蘭西紀行	(旅行感想記)	送料圓十七錢	刊
同	著	櫻の實の熟する時	(長篇作)	送料圓十二錢
同	著	處女作集	(短中篇集)	送料圓十五錢
同	若	淺草だより	(感想集)	近
同	著	藤村創作選集	(小説感想集)	近
同	著	新	生	(長篇作)
芥川龍之介著	影燈籠	(小説集)	近	刊
同	著	春	服	(同)
同	著	鏡花選集	(同)	近
久米正雄著	螢	草	(長篇作)	近

類書藝文

ルウエイル作	妖婦クリシス	萩原厚生譯	送料圓十七錢	刊
キウイリアム・ル作	妖	菊池寛譯	送料圓十二錢	刊
ユイゴ作	此	久米正雄譯	送料圓十五錢	刊
近代佛蘭西作家	近	代	フランソワ小説集	鈴木信太郎譯
ブレヴオ作	マノン・レスコオ	田沼利男譯	送料圓十六錢	刊
ハイゼ作	ララビア	高坂義之譯	送料圓十二錢	刊
メリメ作	チユルヂス夫人	石川剛譯	送料圓十八錢	刊
アラントス作	赤い百合	石川淳譯	送料圓十二錢	刊
同	作	エス・ボナールの罪	岡野かをる譯	送料圓十八錢

類 書 藝 文

大杉 榮著 ■	島崎藤村著 ■	西田天香著 ■	番匠谷英一著 ■	吉田泰司著 ■	倉田艶子著 ■	倉田百三著 ■	レシュニツツ作 ■	ルアイフン作 ■
獄 中 記	藤村詩集	托鉢行願	楊貴妃	鑽られた火	大雀命	處女の死	甦れろ春	のらくら者
(獄中實記)	(全詩集)	(感想集)	(長篇作)	(長短篇集)	(同)	(長篇作)	三井光彌譯	大久保幸次譯
送金料 壹圓 八錢	送金料 壹圓 十八錢	送金料 貳圓 十二錢	送金料 壹圓 九錢	送金料 貳圓 十二錢	送金料 壹圓 十八錢	送金料 貳圓 十二錢	送金料 貳圓 十二錢	送金料 貳圓 十二錢

527  
16

終

